

専門家に聞きました

紀和クリニック在宅ケア科
医師 川邊圭一先生

人生会議の最も重要な点は、医療的選択肢よりも、本人が人生で何を大切にしたいかを言語にしておくことにあります。また、決めた内容よりも、集まった全員で「本人にとって何が良いか」を考え、話し合う過程こそが大切です。まずは、正月やお盆など家族が集まる機会に5分でも話し合うことをお勧めします。また、会議という形を意識し過ぎずに、外出やお見舞い帰りでの



会話など、日常にある発言を記録し積み重ねることで同じ効果が得られます。

人生会議で最初に決めた方針どおりに最期を迎える人は半数程度です。状況に応じてその場で最適な答えを考え、話し合うようにしてください。

ある家族の声

「父の死」について心の準備はできていましたが、自宅での看取りができませんか考えている矢先に亡くなってしまいました。今でもあの最期で良かったのか

と娘として苦悩と悲しみが長引きました。父が元気なうちにしっかりと話をしておけばよかったです。今でも後悔しています。



★ 男の家事教室を実施しました

家事を通して生活スキルの向上や、新たなつながりを作るきっかけとなるよう、令和7年度「男の家事教室」を全5回コースで実施しました。

令和6、7年度に開催した男の家事教室の修了生の皆さんで、交流会を開催しました。みんなで豆腐ホットケーキを作り楽しく交流しました。



地域包括支援センター
主任ケアマネジャー

萩原弘美さん

治療の手立てなく「家族に迷惑をかけたくないので、最期は入院する」と話していた利用者さんが、「ほんまは家におりたいんやで」と本音をポツリ。在宅の看取りに不安なご家族に本人の気持ちを伝え、必要な環境を整え、自宅で穏やかに最期を迎えることができました。ご家族も、本人の希望を叶えることができました。

ケアマネジャーは、利用者の人生の在り方に寄り添い支援しています。人生会議と聞くと難しく感じるかもしれませんが、普段の何気ないやり取りから想いや意思を受けとめ、その人らしい最期を迎えるお手伝いができればと思っています。

地域包括支援センター
社会福祉士

岡田陽子さん

人生会議の研修会で、緩和ケア専門医でありながら父親の「最期をどう迎えたか」を聞けないまま看取ったという講師のお話を聞きました。最期に直面する家族の心理的負担や後悔を減らすためには、普段から本人の希望や価値観を共有することが重要だと学びました。専門職としての経験も踏まえ、ご家族や医療機関などへの橋渡し役として支援をしていきたいと思っています。



▲萩原さん(左)、岡田さん(右)

★ 100歳おめでとうございます

- 福岡 道子さん (高野口町名倉) 大正14年12月生まれ
- 丸山 マツ子さん (神野) 大正14年12月生まれ
- 中岡 ミサ子さん (隅田町真土) 大正15年1月生まれ
- 尾浦 久女さん (柱本) 大正15年1月生まれ
- 勢田 陽子さん (高野口町名倉) 大正15年1月生まれ
- 池田 和美さん (隅田町芋生) 大正15年1月生まれ
- 岡 壽美子さん (柱本) 大正15年1月生まれ
- 石川 照美さん (高野口町大野) 大正15年1月生まれ
- 重入 一枝さん (城山台) 大正15年1月生まれ
- 木下 清さん (高野口町小田) 大正15年1月生まれ
- 土井 節子さん (隅田町芋生) 大正15年1月生まれ